

魔女のミルクグレー^テ スイス

昔むかし、あるところに、ミルクグレー^テという年とつた魔女^{まじょ}がいました。

ミルクグレー^テは、雌牛^{めうし}を一頭しか持っていないのに、五十頭分ものミルクをとることができました。

あるとき、近所の牛飼いがそれをふしぎに思って、ミルクグレー^テの牛小屋^{うしや}にこっそりしのびこみました。かくれていると、ミルクグレー^テが大きなミルク桶^{おけ}をせおって入ってきました。桶の中には、ミルクがほんの少し入れてありました。ミルクグレー^テは桶をおろすと、手でまじないをして呪文^{じゅもん}をとなえました。

魔女の宝^{たから}よ 牧人の貢^{まきびと}よ

どの雌牛からも一さじ分だよ

すると、桶はとびきり上等のミルクでいっぱいになりました。ミルクグレー^テはまた桶をせおって、牛小屋から出でていきました。

牛飼いはその呪文をしつかりおぼえると、大よろこびで家に走って帰りました。そして、自分も牛小屋でためしてみるとしました。ただ、一さじでは満足^{まんぞく}できないで、こうつぶやきました。

魔女の宝よ牧人の貢よ

どの雌牛からも一桶分だよ

すると、桶はミルクでいっぱいになりましたが、やがてミルクは桶からどんどんあふれだしました。まもなく、牛小屋も家もミルクにつかり、とうとう牛飼いはミルクにおぼれて死んでしまいました。

ミルクグレー^テは、牛小屋の棟木^{むなぎ}にすわって、くすくす笑^{わら}いながらいました。

「これで、あいつもわしのまねはできなくなつた」

原話・『グラフィックカラー世界の民話2フランス・ベルギー・スイス』(研秀出版)

再話・村上郁